

松前健先生回想

真下 厚

世界的な神話学者であられた松前健先生は本年三月二十四日に逝去された。享年七十九歳であった。研究者として現役でご活躍の途次であった。

私が松前先生の名前を初めて知ったのは、今から三十数年前のことであった。当時、私は静岡の地で法学を学ぶ学部学科に在籍していたが、大学にあまり出かけることもなく自分が何をしたいのかを求めて苦闘していた。そんなある日、ほとんど毎日のように通う街の書店で刊行されたばかりの先生の三冊目の著作となる『日本神話と古代生活』（有精堂出版、一九七〇年）を棚に見つけた。折口信夫の小説『死者の書』を読んで漠然とした古代への憧憬を抱いていた私は、その本の書名に惹かれて手に取ってみた。なかを開いてみると、世界各地の事例を博搜しながら日本の古代神話について詳細に論じられたもので、門外漢の私にはちよつと歯の立ちそうもない難解なものであった。が、その本はいま、私の手元にある。当時はかなり高価に思われたこの本をその時なせ買い求めたのか、その心境をいま十分には思い出すことができない。しかし、先生のご論のスケールの大きさと研究というものの深さに触れてすばらしい魅力を感じたことは確かであった。この

本が私にとつての、現在の研究分野における初めての専門的な書物だった。

それから十年の後、松前先生は平安博物館から天理大学に移られ、さらに本学へと着任された。当時、私は大学院の研究生であったが、書物を通して古代文学の研究分野へお導きをくださった先生に直接指導をいただけることになろうとは夢にも思わなかつたことであつた。その年、先生は大学院の講義「日本文学原論」において折口博士の著作『日本文学の発生 序説』をテキストとして講義をなさつた。先生の師であつた折口博士の成果を検証し、推し進めようとされたものであつた。翌年の「日本文学原論」ではA・Lordの『The Singer of Tales』をテキストとされ、それを原書で読みながら口頭詞章の叙述・表現について講義になられたことであつた。私もいま、この科目を担当し、W・J・Ongの『Orality and Literacy』の翻訳書をLordなどの説を参照しながら読んでいるところであるが、原論という科目がどのような性格・内容の科目なのかということをお教えくださった一つが先生のこれらの講義であつた。

松前先生の研究は日本の古代神話を世界各地の資料と比較し、世界の神話研究のなかに位置づけられるという大変スケールの大きなものであつたが、こうした先生の研究の方法の一端はこの二年間の講義からもよくうかがわれたことである。先生は常に世界の研究動向を把握することの重要性を説いてくださった。

先生は我々教え子に、時には厳しく糺しながらも、常には大き

な声で暖かく励ましてくださった。深い学識からことばが次々に湧き出してき、それにしたがいがながら熱っぽく話してくださった。先生は、研究に、教育に、いつも全力的に生きてこられた。かつて目を思われて病床にあられたときも、奥様の助けを借りながら、M-Eliaide の『The Encyclopedia of Religion』に執筆された論文の校正を懸命にしておられたお姿が思い起こされることである。

松前先生が本学に在職されていたのは、八年間という、必ずしも長い期間ではなかったが、その存在はきわめて大きいものであった。先生が一人ひとりに蒔いてくださった種子をそれぞれにはぐくみながら、各々の道を歩んでゆこうと思う。

先生、ありがとうございます。

エリアーデの故郷ルーマニアに旅立つ日に

(ましも・あつし 本学教授)